

---

# 光の子 太古の星はとわに輝く

葉隠むつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光の子 太古の星はとわに輝く

### 【Zマーク】

Z6096A

### 【作者名】

葉隠むつ

### 【あらすじ】

中学二年の少女、穂積瑠璃は、最近変な夢ばかり見て いる。夏休みが明けてから転校してきた少年は、その夢の中 出てくる、全身黒ずくめの男の子と何となく似ていた。 そう、瑠璃を殺そつとする、夢の中の男の子に…。

## ACT-1 少女は夢を語る（漫書き）

公園モノドラマンタジーと云ふ話題です。やつらがつたり語んでやつて下さい。

## ACT 1 少女は夢を語る

私は最近、変な夢を見る。ビニガビビツ変なのかと言つと、決まって同じ展開でストーリーが運ぶといつだ。

昔から私は、きちんとしたお話としてまとまつた夢をみたことがない。いつも断片的で、突拍子もないことがつぎつぎとおこり、最後は何がなんだかわからなくなつて、大抵そこで目がさめる。生まれてこのかた14年。ここまでできれいで、はつきりとしていて、何時までも頭に残るような夢なんて、みたことがない。

私は、暗い空間に立つていて。つづん、浮かんでいると言つた方が正しいかもしない。足元に地面の感覚はないし、変な浮遊感があるからだ。暗闇は地平の果てまで続いている。どんなに目をこらしても、尽きるところがあるようには思えない。

けれどそのうち、一條の光が視界をよぎる。その直後、私は虹色の大きな膜に包まれる。膜はまるでジャポン玉のように薄くて、まるで呼吸をしているかのように、表面がふくらんやり七色のマーブル模様を描き出す。私はそれを、ぼんやりと見つめている。夢を見ている間はいつも、

「ああ、これは夢なんだ」

といつう感覚はないし、

「何時も見ている夢だ」

という考え方も思い浮かばない。ただ、目の前に繰り広げられる不思議で幻想的な光景を、受け入れているのだ。

何となく、私がその膜に触るうと手を伸ばす。

ふときがつくと、指先の遙か向こうから、誰かががやつて来る。その人は、全身真っ黒な服を着ている。闇夜のようなマントを羽織つていて、顔もフードで隠れ、口から上が見えない。こちらに駆けてく

るその人を見ていると、なぜか寒気に襲われる。とてつもなく、嫌な予感。でもそれが何なのかわからない。

私が考えているうちに、その人は私の目の前で立ち止まる。長い距離を走ったはずなのに、少しも息切れしていない。虹の膜の向こうだからよくわからぬけど、なぜだか私はその人を男の子だと思うのだ。この夢を見る度、毎回。私はしばらく、男の子の顔をしげしげと眺める。別にそうしても、口から上は見えないのだけれど。男の子が、何か言つた。でも私には聞こえない。問い合わせ正そうとすると、男の子は右腕を振り上げる。手に握られている物を見て、私は驚愕する。鋭い刃物だ。七色の膜の光を反射して、冷ややかに銀に光る。男の子の唇の両端が上に持ち上がり、不気味に微笑んだ。

呼びたいのに、声が出ない。逃げたいのに、足が動かない。男の子は右腕を振り下ろす。虹の膜が破れ、私の頭の上へ、冷たい刃物が…

「嫌だ、やめてーっ！」

そう叫んだ瞬間、私は飛び起きて、現実に引き戻される。

## ACT 2 少女は夏に思いを馳せる

一体いつから、この夢ばかり見るようになったんだっけ？私は日記帳を開いた。

ページをさかのぼり、日付を確認する。

あつた。最初に書いた日が、8月になつてからすぐ。ということは、だいたい三週間前か。ああ、そのころは、まだ宿題なんてどうでもいいやと思っていたつけ。でもそのせいで、今苦しんでいるわけなんだけど。まあ、毎年こうやって過ごしているから、もう慣れっこだけどね。私はさりげなくページをめくつた。7月のある日、こう書いてある。

『今日は終業式。待ち遠しかつた夏休みがやつときた。しかも昨日、部員全員で花火大会に行くことになつた。やつた。玲於奈君と一緒に演劇部にいる時間が増える。』玲於奈君というのは、私と同じ演劇部に所属している、月影玲於奈君のことだ。私は、入部した時から彼のことが好きだつた。でも、恥ずかしがり屋の私には、好きな人に話しかける勇気なんてないから、いつも遠くから見ているしかなかつた。明るくて部内でもムードメーカーの役割をはたしている玲於奈君は、たまに話しかけてくれたけど、いつもイマイチな反応しか返せない。きっと、面白くない奴だなつて、思われてる。でも、玲於奈君を遠くから見ているだけで、私は幸せだつた。和気あいあいと話すなんて、想像もつかない。花火大会の日も、話しかけずに終わる。そう思つていた。けど…

『ウソだ。ありえない。今でも夢じゃないかつて疑つてる。だつて、玲於奈君が私のこと

「好き」

つて言つなんて…』

でも夢じやなかつたつて実感したのは、翌日、玲於奈君に会つたときだ。

私たち演劇部は、9月の文化祭での劇の上演のため、夏休みは毎日のように練習している。監修して、靴を履き替えていたり、玲於奈君とぱつたり出合った。

開口一番、彼はこう言つた。

「おはよ、瑠璃

私はびっくりして、彼を見たまま固まってしまった。だって、花火

大会の日まで

「穂積さん」

と呼ばれていたのに、それが一夜で

「瑠璃」

に変わるなんて、突然すぎる。

「あれ、瑠璃、顔赤いぞ。びうしたんだ？」

私はしどろもどろに答えた。

「え…、だ、だつて、ど、びうして玲於奈君、私を名前で呼ぶの？」

「え？」

今度は玲於奈君が目を丸くする番だった。彼ははつとなにかに気がついたような顔をして、それから悔しそうに天を仰ぐ。

「なんだ。俺ふられたのかよ。あーあ、ショック

「え？ ふられた？」

「昨日、好きだつて言つたじゃんか」

さらりと言われた言葉に、一瞬ついていけなかつた。理解して叫ぶまでに、少し間があつた。

「ええー！ あ、あれ、本当なの？ 私をからかつているんじゃないの？」

「何言つてるんだよ。本気に決まつてるじゃんか」

「う、うそだあ。玲於奈君、冗談が好きなんだから

「本気だよ」

彼は、急に真剣になつて、一步近づいてくる。

「生まれて初めてなんだ。こんなに誰かを好きになつたのは、前から、瑠璃のことがずっと気になつてた。だから、昨日思い切つて…」

玲於奈君は、私にくつつきそなほど顔を近づけてきた。そのときの私のほっぺた、とても熱かつた。どれだけ赤くなつてたんだろう。「瑠璃は、俺のことどう思つてるんだ? 好きなのか、嫌いなのか。もし好きなら、俺と付き合つてくれるか?」

私は混乱していく、すぐには返事を返せなかつた。でも、答えはた

つた一つ。恥ずかしかつたけど、頑張つて口にした。

「私も、好き、だよ…。こんな私でよかつたら、付き合つてほしい」「ありがとう」

玲於奈君は笑つていた。そして、私の唇に…。

「わあー!」

思い出の中の出来事なのに、思わず叫んでしまつた。いけないいけない。でもまさか、ファーストキスがいきなりこんな形でおどぞれるなんて考えたことなかつたから、しううがない。さすがに、このことは日記に書くのが恥ずかしくて、別のことを書いた。

『今日の練習は集中できなかつた。先輩にも怒られた。帰りは玲於奈君と一緒にた。私はほとんど無口だつけど』

彼氏があ…私には、一生できないと思つてたけど、人生、何があるかわからないなあ。つて、ちよつと年寄りじみてるかな? この発想。結局、今日も宿題はあまり進まなかつた。やる気がないんだから、しううがない。眠氣も手伝つて、私はベットに直行した。

## ACT 3 少女は少年と出合ひ

もう一学期だ。今日は始業式。昨日夜遅くまで宿題と向き合っていた私は、眠い目をこすりながら登校した。クラスメートの中には、程よく日焼けしている子もいる。きっと、海にでも行ったんだろうな。私は部活が忙しかったから、お盆のときくらいしか休みが無かつたけど。

そんなことをぼんやり考えていると、後ろから肩をたたかれた。

「瑠璃、おつはよー！久しぶりだね。元気にしてた？」

満面の笑みで元気よく、友達の遠藤かなこが声をかけてくる。

「おはよ、かなこ」

「もう一、私心配してたんだよ。もしかしたら、瑠璃はまだ宿題を終わらせてないんじゃないかなって。どうなの？ちゃんと全部できただ？」

「うん、一応。でも、すぐ寝いんだ」

「そうなの？大丈夫？」

「うん、なんとかなるって」

あぐびをかみ殺しながら、私は笑った。やつぱり、頭が少しほつゝとする。

「なんか不安だな。保健室で寝てくれば？」

「平気平気」

そのとき、始業を告げるチャイムが鳴って、先生が教室に入ってきた。窓側で、夏休みの思い出を話して騒いでいたたちは、まだ話しきりないと、名残惜しそうにそれぞれの席につく。

新学期のあいさつ。出欠確認がすんで、先生は言った。

「知っている人も何人かいるとおもうけど、今日からクラスメートが一人増えます」

その一言で、みんなは興味がわいたのか、少し騒ぎ出す。知つていると声をあげた人もいたけど、転校生が来るなんて、私は知らなか

つた。

「今、廊下で待つてもらってるから、早速入つてもらうね」「どうしてだろう。背中に、突然悪寒が走つた。

「北斗君、どうぞ入つて」

みんなは扉に視線をそそぐ。私も、入つてきた男の子から、田をそらせなかつた。彼が教壇の近くに立ち、先生は黒板に名前を書く。

『北斗一馬』

北斗君は、ずいぶん落ち着いていた。四十人近くの人間に見られているのに、恥ずかしそうな素振りをひとつも見せない。ただ静かに、切れ長の瞳で前を向いている。

「はじめまして。北斗一馬です。よろしくお願ひします」

低いけど、よく通る声だ。なぜだろう、それを聞いて、また悪寒が走る。この子とは今日初めて会つたのに、とても、嫌な予感がする。そのときだ。北斗君と、田があつた。その瞬間、脳裏に夢の光景が浮かぶ。黒い服を着た男の子。口元に笑みを浮かべ、短剣を振り上げる彼。

まさか…。

予感は確信に変わつた。この子は、あの夢の中の男の子だ。笑いながら、私を殺そうとする、あの子に違いない…。

いつの間にか、眠気はどこかに失せて、頭はぐちゃぐちゃに混乱していた。クラスのみんなが北斗君へ向けた拍手の音が、耳に大きくこだまする。

## ACT4少女は少年と対峙する

演劇部室は、校舎の北側にある。日当たりが悪くて多少じめじめしているけど、私はここが好きだ。人通りが少ないからなんとなく落ちつけるし、ひとりでぼんやりしたいときはここに限る。

今は放課後で、本当は2日後の文化祭に向けて劇の練習をしなくちやいけないんだけど、体調が悪いからとみんなに言つて、抜け出してしまつた。ウソはだめだと分かっていたけど、本当は、劇をやるような気分じゃないんだ。私は、今日転校してきた男の子、北斗一馬君のことが、ずっと気になつていてしうがなかつた。私の斜め後ろに座つている彼が、いつ剣を抜いて、私に襲いかかつてくるのかと、そのことばかり考えていた。

自分でも、変だなあと思う。たがだか夢の中の出来事に、こんなに振り回されてるなんて。そのせいで、初対面の男の子に、こんなにびくびくするなんて。

でも、私の中の何かが、危険信号を発しているのは確かだつた。理由はわからない。けれど、そのサインはまるで、本能のようなのだ。静かな部屋で、時計の針の音がかすかに耳に届いた。もう5時半だつた。さすがにそろそろ、練習に行つた方がいいかな。少し落ち着いてきたし。

でも、私がそう前向きに思つた瞬間だつた。背中にさつと悪寒が走る。その正体に気がつく前に、部室の扉が開いた。

現れた人物を見て、私は、言葉を失つた。

北斗君が、私の目を見据えて、静かにそこに立つてゐる。まるで金縛りにあつたように、体が動かない。北斗君が、ゆっくりこちらに近づいてくる。逃げたいのに、足は床に縛いつけられたまだ。どうしよう、誰か、助けて、誰か…。

彼が右手を振り上げた。鋭利な刃物が残酷な牙をむいて……と、思つたけど、よく見ると茶色のカツラだつた。

とつさに事態が飲み込めなくて、私は口を開けたり閉じたりを繰り返していた。「あれ……な、なんで…」

「廊下に転がつてた。これ、演劇部のだ」

簡潔に言うと、北斗君は私にカツラを突きつけた。カツラは、今度の文化祭で使うものだった。何で廊下に落ちてたんだ？

「…わざわざ、ありがと」

私は、ほっと胸をなで下ろす。そうだよね、こんな片田舎の学校の片隅で、中学生が同級生を殺すなんて事件が起こるはずがない。ほんと、あんなこと考えるなんてどうかしかりやつてゐるなあ。

北斗君は、首をめぐらして、散らかっている部室内を物珍しそうに眺めている。それからまた、私に目線を戻した。やつぱり、ちよつとだけ怖い。

「穂積さん…だっけ？俺と同じクラスだよな」

「うん」

「演劇部なんだな」

「うん」

「今度、文化祭で何かするのか？」

「うん……一応」ああ、すじくぶつきらぼうな返事しかできでないなあ。不振に思われそう。頑張つて何か言わなきや。

「私も、一応舞台に出るんだ。もし、良かつたら見に来てね」

その後、一言三言言葉を交わして、北斗君は出ていった。扉が閉まつた瞬間、体中の緊張が一気に解けてその場に座り込んだ。思わずため息をつく。

だめだ、やつぱり、あの子が怖くつてしまふがない。こんなふうにいちいち怯えていたら、絶対に身が持たないよ。

けれど、へたりこんでる暇はなかつた。なぜなら、先輩がカツラがなくなつたと書いて、あわてて部屋に駆け込んできたからだ。私は、そのまま先輩と一緒に練習場所へ走つて行つた。

## ACT 5 少女は文化祭を待ちわびる

「どうして、私とあなたは一緒にになれないのですか？」

体育館に入るなり、ヒロイン役の若山先輩の声が耳に飛び込んできた。私は練習の邪魔にならないように、観客席側で見守つてゐる千尋の隣にそつと座り込む。

「瑠璃、一体どこからついてたのよ？」

千尋がまるでどがめるようにささやいてきた。

「ごめん。ちょっと具合悪かつたんだ。もう大丈夫だから」

「しっかりしてよね。あんた一応、キャストなんだから」  
そうなのだ。

私はこの劇で、主人公の家の召使い役をすることになつてゐる。ちなみに劇はどんなストーリーかというと、まあ、一言でいうとロミオとジュリエットみたいな感じ。ある男女の報われない恋物語なんだけど、せつかくの文化祭だし笑える劇にもしたいということでおまけは面白がつてもらえるような場面も入つてゐる。部員全員で、春から台本を練り上げ、頑張つて作つた作品だ。だから、何としても成功させたい。

「私もできることならば、魂の朽ち果てるまであなたと共にいたい。  
けれど、それはできません。運命の女神がお許しにならない」

「これは若山先輩がやる役のお相手。なんと、玲於奈君がキャストをやつてゐるのだ。おそらくこれは、玲於奈君の人気を利用して観客動員数を増やそうと、この部長と顧問の考えに違いない。でも、確

かに玲於奈君はこの役が妙に合っている。彼はもともと芝居が上手いし、感情表現なんか見事で、見ている人を引き込む力もちゃんとある。私が彼に思いを募らせた理由の一つは、これかもしれない。「ウーン。相変わらずだなあ。玲於奈君は」

「どういひこと?」

「すうごくいい」

「え?」

「これは立ち見も現れるかもしれないわね」

「そうだね。玲於奈君人氣あるから」

その人氣者である玲於奈君と付き合っているのは、何を隠そうこの私。でも、このことは部員の誰一人として知らないのだ。なぜかといふと……

「もしも、部内恋愛禁止じやなかつたら、すうじことになつてたな、絶対」

「……こわーい。考えたくない」

私と玲於奈君が付き合つてゐつてばれたら……無事ではすまないきがする。

「だから瑠璃、悪い」とは言わないからあきらめなさいよ

「え! 何のこと? !」

鳥肌が一気に立つた。勘のいい千尋には、わかつてたのかな。

「とぼけても無駄よ。玲於奈君に片想いするなんて、時間がもつたいないからやめときなさい」

「ああ、何だ。そういうことか。」

## ACT 6 少女と彼の帰り道

玲於奈君は、笑っていた。あまりに笑うから、私はちょっと頭にきた。

「もひ、笑うのやめてよ

「『めん』めん。田辺さんがおかしくって」

田辺とは、千尋の名前だ。

「そつかー。片思いは見抜いたけど、両思いはダメか」

また玲於奈君は笑い出した。私は無視してそのまま歩く。

「ああ、待ってくれよ、瑠璃。悪かつたつて……瑠璃？」

玲於奈君は驚いていた。私が泣いていたからだ。

「玲於奈君は……心配じやないの？私たちが付き合つてばれたら……もう、あそこにはいられないよ。部活辞めなきゃいけなくなるかもしれないんだよ！」

抑えようとしても、後から後から涙があふれてきて、ビクビクもなかつた。

「私、怖い……玲於奈君と、離れたくない……」

とうとう、私は道端にしゃがみこんでしまった。玲於奈君から顔を背けるようにして、私は泣き続けた。

「俺だつて、同じだよ」

そばで、玲於奈君がしゃがむ気配がした。

「俺も、瑠璃に告白する前に、こんなことしてもいいのかって思つた。けど、お前も、部活も、大好きなんだ。だから、どっちも自分のものにしてようつて……」

私はそつと顔をあげた。玲於奈君と田辺が合ひつ。彼はちょっと恥ずかしそうに、はにかんでみせた。「俺が、欲張りなだけなのかもな」そつこつと、ハンカチを差し出して、立ち上がつた。

「今日は先に帰るよ。俺のせいだ瑠璃を困らせちゃって、ごめんな。それと、泣きすぎるダメだぞ。明日の文化祭で田辺が腫れたまま芝

居なんて、かつこわるいからな」

軽く手をあげて、玲於奈君は走つていった。

私は、手の中の青いハンカチと、夕日で赤く染まる彼の背中を交互に見ていた。

私も、欲張りになりたい。

あなたも、部活も、あきらめない。

玲於奈君、大好きです。本当に、大好きです。

何か、心に引っ掛かるものがある。しかし、それが何なのかは分からぬ。

日も暮れかけた、学校からの帰り道。背中に夕焼けを浴びて、少年は一人思案していた。足元に、薄く引き伸ばされた影がまとわりついてくる。

なぜ自分は、あの少女に既視感を覚えたのだろうか。

名前は確か、穂積瑠璃。肩まで伸びた、ちょっと長めの黒髪に、同じ色の大きな瞳。どうやら、演劇部に所属しているらしい。落ちていたかつらを届けたときに、部室にいたのを見て理解した。

少年は、そのときの自分の行動を思い出してちょっと反省した。初対面に等しい相手を、ためつすがめつじろじろと眺めてしまつたのだ。既視感の理由を探るためだったのだが、少し誤解を「えたかもしない。少女はよそよそしい態度をとつていたのだが、今思えば、あれは自分を怖がっていたのだろう。無理もないことだと思つ。そういうえばもうひとつ、不思議に感じたことがある。

演劇部室に入り、少女に歩み寄つてかつらを渡すまでの、あの間。少女と目が合つたときに、ふとある考えが沸き起つたのだ。自分はかつて、このような場面に遭遇したことがある。緊張をはらむ視線を交わし、誰かに歩み寄つたかすかな記憶がある。いつだつたかは分からぬ。けれど、そのときほんの一瞬だけ、手に握つていたかつらはかつらではなかつた。

自分は、冷たい刃物をしつかり握り締め、目の前の穂積瑠璃を刺そりしているのではないか。

馬鹿馬鹿しいが、確かにそんな妄想に取り付かれた。彼女に感じた既視感と、何か関係があるのかもしれない。

少年は、視線を上げて空を見る。東側の空は、既に赤い皮がはがされて紺色に変化していた。

「穂積、瑠璃か……」

心が少々もやもやしたまま、少年は家路を急いだ。

「ほら瑠璃、見てみなよ。お密さんいつぱい入ってるよ」

舞台の袖口からそつと観客席側を覗き込んでいた千尋がささやく。でも私は、それどころじゃないのだ。だつて千尋と違つて、数分後には舞台に立たなきやいけないんだもん。

指先が冷たい。呼吸も早くなつて。ああ、緊張しちゃだめだ。集中しないと。集中しないと。必死に自分に言いきかせる。

「なにガタガタ震えるのよ。ほら」

いきなり千尋は私の服を引っ張つて、緞帳の隙間から観客席を見せる。

「ほら、後ろの席までぎつしり。いっぱい来たわねえ。玲於奈君効果かなあ？」うわあ、このお密さん的人数、半端じゃない。確か、体育館の横にあるこの講堂は、一階と二階あわせて五百人収容可能じゃなかつたつ。今見えてるだけでも、少なくとも一階にはもう人は入りきらないんじゃないかなあ。一体、全校生徒が何人来てるんだろう？

「こら、あんたたち。そこにいたら下手（下手）側のお密さんに見えるでしょ。こっちに来なさい」ヒロイン役の若山先輩にとがめられ、私と千尋はあわてて上手かみての奥深くにひっこむ。ちなみに、上手かみてと下手は演劇の専門用語で、密席から見て舞台の右側が上手、左側が下手なのだ。舞台に立つて密席に向かうとこれが逆になってしまふから、気をつけないといけない。

「わあ、先輩。かわいいです」

千尋が感嘆する。先輩は良家のお姫様役だから、清潔感のある白いドレスを着ている。といつても、裾は広がつてなくて、動きやすい、筒形のドレスだ。

「それは、私が？それとも衣装が？」

「やだなあ。どつちもに決まつてるじゃないですか」

「いや、私の方がかわいいわよ」

本番一十分前だというのに、先輩と千尋は「冗談を言つて笑い合つていた。

いいなあ、若山先輩は気楽そうで。私もあんなふうにかまえる」と  
ができればなあ。

そう思つて、二人の会話を羨ましげに、しばらく眺めていた。やがて千尋は、

「私、音響だから音響席にいくね」と言つて、ひらひら手を振つて舞台袖に消えていった。

私と若山先輩の間に、少しだけ、沈黙が降りる。周りは、支度を整えた他のキャストや顧問の先生や、最後の仕上げをしている衣装係やメイク係が、薄暗い空間にひしめいていた。

「玲於奈君、ちゃんと準備できたかな……」

我知らず、私はつぶやいていた。独り言のつもりだったのに、若山先輩は聞き取つたらしく、言葉を返す。

「大丈夫よ。月影君は、私よりよっぽど演技がつまいし、度胸も座つてる」

「でも、先輩だつて……」

そう言いかけて、私は気が付いた。若山先輩は、まるで祈るよう胸の前で手を組んでいる。

指が、震えていた。

「もう、私ったら緊張しつぱらし」

若山先輩は、何かを払拭するようにつとめて明るく笑つた。

「慣れないんだよねえ。この本番直前の緊張感。毎回足が震えるの。でも、舞台の上でライトを浴びたとたん、ぴたつておさまるんだ」若山先輩は、私の方に振り向き、優しく笑いかける。

「大丈夫だよ。今まで練習で培つてきたものを、最大限に出せばいいから。後は、演じることを思いつきり楽しもうね」

「……はい！」

そうだ、今は、全力で頑張るつ。

思いつたり楽しんで、  
思いつたり最高の演技をするんだ。

そして、熱氣で満ちた講堂に、低いベルが鳴り響いた。

## ACT 8 舞台が始まる

劇は順調な滑り出しをみせた。

まずは、第一幕。若山先輩が演じる、良家のお嬢様の家の場面。私はまだここでの出番はないから、舞台袖に控えてじつと見守つているだけだ。

今のところ、台詞のミスはない。みんな、練習どおりに、それ以上に、舞台の上で輝いていた。

舞台の真ん中の椅子に腰かけているのは、若山先輩が演じる、おつとりしているけど時に大胆なクラディウスお嬢様。

そのまわりには、取り巻きの執事に、召使い。あと、母親もいる。場面は、母親がクラディウスに結婚をせまっているところだ。

私は、頭の中で脚本を思い浮かべながら聞いていた。

母親：クラディウスや、お前にはたくさんのですきな殿方からお声がかかるつているのですよ。その全部を断るなど、まさか馬鹿な事を言つつもりではないですよ？

クラディウス：いいえお母様。そのつもりです。

母親：な、なんと！お前、いまなんと言つた？！

クラディウス：わたくしは、誰とも結婚しませんわ。結婚なんていやでござります。

母親：わがままを言つもんじやありません！そなたには、いざれだれかと結婚してもらひ。それがそなたのためでもあるし、我が家のためにもあるのですよ。

クラディウス：わがままなのはお母様ではありませんか！この家のことなど、わたくしには関係ありません！失礼します！

母親：お待ち！クラディウス。クラディウス！

クラディウスがはけて、つまり、舞台袖に移動して見えなくなつて、暗転。真つ暗な舞台の上では、慌ただしく次の場面のセットが準備される。次こそ、私の出番だ。

セット準備が終わつて、キャストが舞台に出そひつ。そして、照明。私はその瞬間、舞台の上で生きる別人となるのだ。

場面は、玲於奈君が演じる、とある若君の家。

若君ことレオナルドは、椅子に座つて窓の外を眺めている。うーん、さすが玲於奈君。貴族っぽい衣装も似合つてゐるし、憂いをおびた横顔がすこくすてきだ。これでまた、玲於奈君のファンになる女の子

が増えそうだなあ。

舞台上だといふのに、私はほんの一瞬だけ、そんなことを考えてしまった。

舞台には、レオナルド以外にもうあと一人いる。年老いた執事と、私が演じる召使いが一人。

レオナルド：手紙は、まだか？執事：手紙？

レオナルド：そうだ、手紙だ。彼女からの手紙だ。

召使い：今日、届くはずなんですが。後で、姉と落ち合つ約束をしてますので、その時にでも聞いてみます。

レオナルド：ああ、たのむ。

執事：しかし、レオナルド様、いつまでもこのようなことが隠し通せるとは到底思えませんが。

レオナルド：わかっている。それに、彼女の父と僕の父はあまりにも仲が悪いからな。ばれた後、一体どうなる事やら。執事：この家で、この秘密を知るものはわたくしとこの召使いだけ

召使い：あちらの家では、私の姉だけでござります。姉は随分前からクラディウス様にお仕えしてますから、秘密をもうすよつまねは誓つてしません。

レオナルド：お前たち姉妹には、危ない橋を渡らせているな。いつも、すまない。

召使い：そんな、レオナルド様。もつたいないお言葉です。このくらいは、当然のことです。

執事：実を言え、わたくしは、最初はお一人の仲に反対でした。しかし、レオナルド様、恋の病にとらわれたあなた様を見ていると、あまりにも痛々しい。これでは、力になるほかないではありませんか。

レオナルド：お前たちには、心配ばかりかけてるな。

私は、恐らく一度きりの付き合いとなる召使いの役を一生懸命演じながら、その一方で、冷静に舞台と客席とを見ていた。

うわあ、ほんとす、い人数のお客さんだ。全員の視線が肌に突き刺さつてくるよう、ひどく緊張すると同時に、ぞくぞくして自分

がいる。

舞台に立つこと、証明を浴びること、違う人生を演じる」ことが、楽しくて、とてもない快感にかわるときがある。今、私はそれを体験してるんだ。

練習は、つらいことがたくさんあつた。だめ出しをいっぱい言われたり、演出をした先生に厳しいことを言われたり。やめたいと思つたことも、めげそになつたこともたくさんあつたけど、でも、みんなと一緒にここまでやってきたんだ。お客さんも、たくさんいる。

絶対に、成功をセム。

このとき私は、自分の身にあんなことがおこるなんて、想像もできなかつたんだ。

## ACT 9 少女は異変を感じる

最初に変だな、と思ったのは、舞台の上。クラディウスからレオナルドへの手紙を、真夜中の路地で受けわたすという場面。

ここは、私が演じる召使いの役と、その姉役しか出てこない。台詞のやりとりもそんなに長くないから、舞台のすみつこのほうで、局部的に当てられた照明に一人の姿が浮き上がっている。そんな場面。私は台詞を言つ。

召使い：じゃあお姉ちゃん。また、今度ね。

姉：気をつけて帰るのよ。

召使い：わかつてゐるわよ。お姉ちゃんこそ、夜道に気をつけて。ク

ラディウス様が頼れるのは、お姉ちゃんだけなんだからね。

そして私はきびすを返した。返そうとした。でもその時。  
頭の中に、声が響く。

『ねえ……あなた……あなたなの？』

「え……？」

一瞬くらつと、めまいがした。その瞬間、照明が変わり明転。舞台中央が明かりに照らされ、セットが現れる。いけない。このままじゃ、私が舞台袖に引っ込めないまま、次の場面が始まっちゃう。頑張つて歩こうとしたけど、また、さつきの声。さつきよりもひどいめまいに襲われる。私はたたらをふんでその場に倒れそうになつた。

けど、きつぎりで姉役の越野先輩が抱きとめてくれた。立ち上がりずにぼんやりしていたら、舞台袖から千尋が出て来て、先輩と一緒に素早く私を運ぶ。

越野先輩と千尋は、私を舞台袖奥に運んで、小さな声で話始めた。

「先輩、瑠璃どうしちゃったんですか？」

「私もびっくりした。うーん、貧血なのかなあ

越野先輩は、私の額に手のひらをあてる。

発熱なんて、してるわけがないのに。それくらい、自分でわかる。でも、そんなにぼんやりとした顔をしてるのかなあ。もしかしたら、してるかもしない。今、私の頭の中に、さつきの声がこだましている。

あなた……あなたなの？ そう、聞こえる。

ずっとその言葉の繰り返し。

誰なんだろう。誰のかはわからないけど、でもこれは、女の子の声。か細くて、まるで泣いているよう。何度も何度も、何かを確認しているみたい。

何度も何度もあなたなの、と。まるで、その相手に必死にすがりついているように。

まだめまいは続いている。変な声も聞こえる。世界が、不安定に揺らめいている。

私は青ざめた。どうしよう。まだあと一回は、舞台に立たなきやいけないのに。私の最後の出番があるのに。いつも、ここで弱音なんか、言つてられない。せっかく練習したんだ。せっかく本番を迎えたんだ。頑張らなきや。私は無理やり自分に言い聞かせる。

「ごめんなさい。先輩、千尋も。ちょっとふらりとしただけ。もう、大丈夫だから」

私は、一人に笑いかけた。まだ視界が歪んでいる気がするけど、そんなこと言つてられない。やらなきや。私はやらなきやいけないんだ。

私は、千尋の制止も、先輩の忠告も聞かなかつた。心配してやつてきた。顧問の先生にも、無理に笑つてみせた。先生は厳しい顔をして、それでも、

「やりたいのなら、やりなさい」

と、後押ししてくれた。

私は、自分の最後の出番まで、すみっこで座り込んでいた。めまいと変な声に負けないよにと、必死で戦つた。でも、気分がよくなることはなかつた。だからといって、それ以上悪くもならなかつた

けど。

どれくらい経つたかな。襲いくるめまいに必死で耐えていたから、時間の感覚はほとんどなかつた。頭上で、千尋の声がする。

「そろそろ出番だよ。大丈夫？」

私はゆっくりと立ち上がり、軽く頭をふつた。ため息をつきながら答える。

「うん。何とかできそうだよ。それに、次の場面は、ほんとはあまり台詞はないからさ。たぶん大丈夫。間違つても、倒れたりなんかはしないよ」

言つてから、まづい、と思つ。よけいな一言がついちやつて、千尋はますます心配そうな顔になつちやつた。

「えー……ねえ、それならさあ、抜けても何とかならないかなあ。悪いけど、他の人にアドリブしてもらつとかさ」

「ううん、それはイヤなの」

私はすかさず否定した。

途中でやめるなんて、今更、考えられないから。

「私、やりたいの。大丈夫。この劇、みんなで成功させたいんだ」

私は、まつすぐ前を見た。少し離れた舞台からは、キャストの声が聞こえる。この日のために、みんな、頑張ってきたんだ。ゴールまでもう少し。投げ出すなんて、リタイアなんて、やだよ。

頭の声は、相変わらず鳴り止まないけど、私は頑張る。舞台が、照明が落ちて暗くなる。

私は、静かに歩きだした。

後ろから、千尋の励ましの声が聞こえた。

## ACT10 そして少女は見る

場面はいよいよクライマックス。

とうとう、クラディウスとレオナルドの仲が、両家にばれてしまった。

その責任を感じた姉妹の召使いは、自ら命を絶とうとするんだけど、クラディウスとレオナルドに止められる。

そこで、私の出番は終わり。舞台から退散して、でも頑張ってラストまで見守ることにした。倒れるのは、その後からでも遅くはないからね。

照明がかわる。夜。追っ手から逃げてきたクラディウスとレオナルドが、一人きりで海辺にいる。

クラディウス：レオナルド様、わたくしはもう、走れません。

レオナルド：そうですか。ならばここで、休憩いたしましょう。

クラディウス：しかし……。

レオナルド：大丈夫ですよ。だいぶ走りました。少しどまくらいいなら、平気です。

クラディウス：レオナルド様……。なぜわたくしとあなたは、このような運命をたどったのでしょうか。

レオナルド：僕も、繰り返し考えたことがあります。あの日、あの

とき、気まぐれをおこして父と共に王宮に行かなければ、あなたに会つことはなかつた。

クラディウス：そうです。本当はわたくしたちは、すれ違うことすらなかつたでしょ？」

レオナルド：でも、出会つてしましましたね。クラディウス姫。

クラディウス：はい……レオナルド様。……レオナルド様、どうしてあなたとわたくしは、一緒にはなれないのですか？なぜ夫婦として添い遂げることが、できないのですか？わたくしは、あなたへの想いが抑えきれなくて、こんなにも苦しんでいるというのに。

レオナルド：クラディウス姫……。それは、僕にもわかりません。できることなら、僕も魂の朽ち果てるまで、あなたと共にいたいと思つています。それ以上に、何を望めばいいのかわからない。それ以外の幸せなど、ないとも考えてます。けれど……運命の女神が、お許しにならないのでしょうか。

クラディウス：なぜですか？なぜ、そのよう、な……どうして？

レオナルド：泣かないでください。愛しい姫。どうか、そんなに悲しい顔をしないで。

客席もそして舞台裏も、みんな息をのんで一人の劇を見守つていた。そこは講堂じゃなくて、劇の中の世界。そこは舞台じゃなくて、星またたく夜の海辺。

役者は、悲劇の恋人になりきつてゐる。若山先輩は若山先輩であるけどクラディウスでもあり、玲於奈君は玲於奈君であるけどレオナ

ルドもある。生まれるそばから消えていく、一度しかこの世に現れない劇。再演はいくらでも可能だけれど、演劇はなまものだから、演じるごとに姿を変える。私は、そんな演劇を面白いと思った。一年前の四月、先輩方の劇を見て、とてもない魅力を感じて入部した。そして引っ込み思案の私は、今回初めて舞台に立つた。だから私は、見守りたかったんだ。

初めて役を与えられた劇を、見届けたかったんだ。

けれど私は、舞台裏の隅っこで一人うすくまつっていた。頭が痛い。でも必死で我慢する。あまりの鈍痛に声をあけでわめきたかったけど、そんなこと、許されない。みんなが仕方がないと言つてくれても、私は自分を許さない。

頭の中で響く声が、さつきよりひどい。ひどいなんでものじゃない。暴れてる。誰のものかわからない声が暴れてる。たくさん暴れてる。錯綜して交差して、言葉の端々だけが聞き取れて、会話にまるでなつてない。

『あなたなの！？』ねえあなたのつゝ答えて、ずっと会いたかったの。もう、会えないと思つてた……』

『あいつはやめておけ』

『おはつにお皿にかかるます。僕は……』

『なんでそんなひどいこと言つてのよつ……』

『あなたを守りたいと思つのは、迷惑ですか？』

『うちこくればいい』

『樂になる。だから……』

『行きたいんです。行かなきゃいけない。あなたのためにも……』

『よけいな悪あがきだな』

『待ってるわ。信じてるわ。愛してるから……。あなただけよ。これからもずっと。私の魂の生きる限り』

（わめかないでよ！）

私は心中で叫んだ。よつやく、千尋やほかの部員が何人か、私の異変に気がついた。

もうだめ。もう無理。全身が汗ぐっしょりだ。頭が痛すぎて耐えられない。場所が場所だからうめくこともできない。唐突に、頬を、つと涙が流れた。千尋が今にも泣きそうな顔で何か言つてる。でも、わからない。

まだまだ、声はずっと続いている。

『許されない』

『お前、正氣なのか？それとも死ぬ氣か？』

『だめなんだ。だめなんだだめなんだ。こんなに好きなのにな』

『だから、どうした？』

『奴らが攻め込んできたぞー。』

『我らの有史以来の一大事だ！』

『私が……だつたら、一緒にいてくれた？結婚してくれた？』

『いいえ、僕は、あなただけ』

『「めんなさい。困らせるつもりはなかつたの……でも、心が騒いで……。あなたのことを考えると、自分が変になつちゃう』

『あんなのに、執着するなんておかしいなあ』

『暇つぶし？つづき、本氣だよ』

『だめだよ！お願い！逃げて！』

『滅びるなど、断じてあつてはならん！』

そして、声は唐突にやんだ。

何の前触れもなく。ふつと乱暴に途切れて。次に襲つてきたのは、映像だつた。

悲しいほどに柔らかな陽光。静かに晴れ渡る青空。

どこまでも続く、草原。花畠。ぽつぽつと、黄色い花が新緑の茎からこぼれそう。

菜の花かな？

そこに、真っ白い服を着た人が、一人。向かい合つてじつとしている。

顔は、被つてるブーケやフードのせいで見えない。

二人は、どちらともなく抱きしめあって、そして、キスした……よう見える。私からだと、唇が合わさっているかどうかよく見えな

いか  
ら。

たぶんきっと、この一人は幸せなんだ。なんとなく、そう思った。  
きっと、どうしようもなく愛し合つてる恋人同士だ。やがて一人は  
離れて、男の人だと思われる方が、もう一人の頬をいとおしげに撫  
でた。

そして、男の人は、倒れた。

仰向けに、ゆっくりと。女の人は、一瞬固まる。

静かすぎる沈黙。  
絶叫。

頭から胸にかけて、真っ赤な血で染まつた男の人。

状況が理解できず、わめき続ける女の人

ふと目をやつた男の人の右手が、動くのかわかった。  
その手に握られて、ハルのは、豆剣。

そう、短剣だ。

あの、夢の中の男の子が握っていた短剣に、あまりにも似ていた。

男の人は起き上がつて、女人を連れて、和田の山へ行つた。

私の絶叫が、講堂に満ちた。  
それに気づく余裕もないまま、私は、痛みと恐怖のあまり意識を手放した。

## ACT11 少女は夢から醒めて

「……？」

「私、どこで眠っているんだ？」  
「固いベッド。やたら音があるやば枕。

保健室、かな。

きつとそだらうな。私、気絶しかやつたんだ。  
もつ、頭は痛くない。めまいもしない。  
うつすらと目を開けてみる。しばらく視界はぼんやりしてたけど、  
やがて私は一人の顔をとらえた。

「玲於奈君……」

玲於奈君は、私の顔を覗き込んでいた。私は彼の名前を呼んだとた  
んに、急に抱きしめられる。

「わっ！れ、玲於奈君ちょっと……」

かぶさつてきた玲於奈君のぬくもりと体の重さを感じて、私はうろ  
たえた。誰かに見られたら、大変だよ。そう言おうとして彼の顔を  
見たら、両頬に涙が。体も震えている。

「瑠璃、瑠璃……よかつた……」

玲於奈君は、しゃくり上げながらそう繰り返す。私は、玲於奈君の  
手を振り払うのをやめて、かわりに彼の背中に腕をまわした。よく  
考えたら、いつもやつて玲於奈君と抱きしめあつのは初めてかもしれない。  
ちよつと赤くなりながら、玲於奈君に優しく言つ。

「ありがとう。もう、大丈夫だから」

ややあつて返事がかえってきた。

「「めん。本当に」「めんな、瑠璃」

「やだ、どうして謝るの？謝らなきやいけないのは、むしろ私のほ  
うだよ。玲於奈君がお芝居やつてると、全部みれなかつたんだか

「芝居なんて、お前に比べたら……」

「う」

急に、玲於奈君の声が鋭く低くなつて、少し驚いてしまつた。そして意外だつた。玲於奈君はいつも明るくて、かげりのある感情を一切見せない人だつたから。

玲於奈君はゆっくりと私から体を離して、今度は間近に顔をよせてくる。その瞳は、怖いくらいに真剣だつた。

「お前に……瑠璃に比べたら、大切なものなんて何もない。瑠璃以外のものは、すべて無意味なんだ。瑠璃しかいなくたつて、俺は平気だし、瑠璃以外はなにもいらない」

……あれ？ なんだろ？ この台詞。これつてさつきの劇の続き？ いや、そんなわけないよね。でも玲於奈君、どうしていきなりこんなこと言うのかな？

とまどつて何も言えないでいると、いきなり唇が暖かくなる。

玲於奈君が、私の唇を奪つ。

「…………」

突然のことに呆然としていると、玲於奈君は私の肩を押さえつけ、よつせらに深く口づけをしてきた。

「…………つ…………」

息が苦しい。たぶん今、耳まで真つ赤だとと思う。あらがおつとして体をひねるけど、玲於奈君の方が力が強い。彼は、むさぼるようにして、唇を求めてくる。今回、玲於奈君との一回目のキスは、この前のような甘いものじゃない。何て、荒々しいんだら？ 玲於奈君が、怖くなつた。彼は私の意志とは関係なしに、ひつひつてやりたいようにできるんだ。

「んつ…………！」

長かったような、短かったような、永遠とも刹那ともとれる時間が過ぎて、やつと玲於奈君は離れてくれた。私は素早くベットから飛び起きて、玲於奈君が立つている場所とは反対側に逃げる。なんでだろう。玲於奈君は落ち着いていた。ちょっと長めの前髪をかきあげて、息ひとつ乱さないでいる。私はこんなにも動搖して、自分の心臓の音まで聞こえるつていうのに。

ふと玲於奈君は私の方をむいて、にっこりつむつほほ笑んだ。

「かわいいな、瑠璃」

そして、くすくす笑う。

「ティープキスって、知らない？」

体中の血が、恥ずかしさで爆発しそうだった。  
おびえた子犬のようにならうたえる私を見て、玲於奈君はけらけら声をあげた。いつものように、部活で快活にふるまう彼のように、とても元気な笑い方だ。

「俺に心配かけたおかえし。いいだろ？ 俺たち付き合ってるんだから、ここのくらい激しくやつたてさ」

彼があまりにも簡単に元氣なので、からかわれると思つて怒りがこみあげてくる。

「は、激しすぎるよつーすこくびくつしたんだからー。」

「そう？ んじゃ、どつきり成功だな」

「そ、そんなあ。どつきりだなんて。ひどいじやない」

「ひどくないと俺は思うけど。瑠璃が倒れたって聞いたとき、どれだけ驚いて心配したと思つてるんだ？ だから、これくらいはいいだろ？」

「い、いいだろつて……そんなこと言われても……」

私は上田づかいに玲於奈君を見た。言葉を紡ぐうとしたけど、さつきのことを思い起こすだけで、パニックを起こしそうだ。どうやら既に起こしてる。だいぶ時間が経たないと、冷静になれそうにはいし、頬の色も元には戻らないだろ。

玲於奈君はもう一度ほほ笑むと、私の頭に手を置いた。

「俺は瑠璃のそんなとこも好きだよ」

もう、玲於奈君つたら。そういうことをビートして平気な顔して言つんだろう。恥ずかしないのかな。

「んじゃ、帰るか。べつにクラスの方に顔出さなくていいよな。瑠璃、途中まで送つてくれよ」

「え、でも……」

「遠慮するなよ。明日も午前中に公演があるんだから、今日はゆつくり休めよ」

玲於奈君は、部室に置いてあつた私の鞄を持ってくれた。

私たちは、一人そろつて玄関を出る。

どうしよう。送つてくれるのはありがたいけど、平気な顔して隣を歩く自信がないよ。

心臓が鳴りっぱなし。私、どうしたらいいんだろう。

そんな気持ちを知つてか知らずか、またもや玲於奈君は軽い調子でこう言った。

「俺ね、実践経験はないけど予備知識はあるんだ。何なら試してみる？」

私は首だけをぎこちなく横にふつた。そして玲於奈君に笑われた。

「穂積さん」

唐突に、後ろから声がした。私と玲於奈君は、いっせいにふりむく。そこにいたのは、北斗一馬君。

一瞬、短剣を握つた男の子が現れたのかと思つた。背中の皮膚が、わずかに粟立つた。

「」では少し、話の時間軸をさかのぼることにする。

北斗一馬は、転校してきてから初めての学校行事を、少しの期待と緊張と共にむかえた。

文化祭一日目の朝、クラスにつくと、皆は既に最後の準備におわらわだつた。この学校は、クラスごとに催し物をするという方針らしく、一馬のクラスは喫茶店をすることになつていて。とはいっても、衛生面を考慮して、実際に料理をすることは禁じられているので、あらかじめ業者から購入したものを盛り付けするだけなのだが。店の飾り付けをチェックしていると、すぐそばで同じ作業をしていた穂積瑠璃と目が合つた。しかし、少女はすぐにそっぽをむいて、別の場所を確認しにいく。その行動が何となく、さみしいといえさせみしかつた。

一馬は、いまだに瑠璃に感じた既視感の正体をつかめずについた。本来なら、もうどうでもいいとなげやりになつてもおかしくないのに、ずっと疑問に思つている。

自分は、あの少女と会つたことがあるのか？  
だが、一体いつ、どこで？

それがわからないと、だいぶ前から心に巣くうもやもやがはつきしそうになつた。

一馬はひどく疲れたように、小さくため息をつく。  
と、そんな憂鬱な思いなど知らない女子たちの、賑やかな話し声が聞こえてきた。

「穂積さん、劇、頑張つてね  
「私、絶対見に行くね」

「あーあ、午後はお店の当番だから、今日はだめなんだよねえ。でも明日、絶対見に行くから」

「ねえ、玲於奈君主役なんでしょう？絶対絶対行くよーかつこいい姿

をみなきや 「

どうやら、数名の女子が穂積瑠璃を中心に集まって、演劇部の文化祭公演の話をしているようだ。

これは一馬が驚いたことなのだが、どうやらこの学校は、演劇部が随分と活動的であるらしいのだ。一馬のイメージだと、普通は吹奏楽や合唱というような部活が文化部の代表格に躍り出るものだが、ここは違つりしい。

そういうば、と、ふと数日前を思い出す。

廊下に落ちていたかつらを、演劇部室に届けたことがあった。そこで穂積瑠璃に会い、劇を見に来ないかと言われた。

女子たちの会話を盗み聞きしての限りでは、どうやら今日は午後に上演するらしい。

実は、午後は暇なのだつた。特にこれといつて用事もないし、転校したてだから一緒に歩きまわってくれるような友達もまだいない。それに入ごみの中をむやみやたらと動き回るのも、あまり好きではない。

一馬はぼんやりと、午後の予定を決めた。

体育館横の講堂は、なかなか大きかった。

一体、何人の生徒がここに集まっているのだろう。開演前の客席は喧騒に満ちていて、ささやきが別のささやきを呼び、さらにそれが大きな波となる。一馬は少し右よりの奥の席に腰かけ、ぼんやりと開演を待っていた。

そのときだった。

誰かが、耳元でささやいた。

『やめておけよ』

最初は、後ろの席の誰かが連れと会話をしているのだと想つて気にもとめなかつたが、また再び、声がする。

『やめておけよ』

今度は、あまりにもはつきりと聞き取れたので、勢いよく後ろを振り返つた。しかし、いましがた自分に話しかけたと思われる人物は、見当たらなかつた。念のため左右の席にも首をめぐらすが、やはり違う。

(何だ、今の声？)

疑問に思うが、答えてくれる者はいない。

そのかわり、もう一度謎の声は言った。

『やめておけよ。身の破滅のもどだ。よりこよつて、何で……』と、そこでアナウンスが流れた。開幕を告げる内容のものだつた。しかし、一馬の注意は途切れることのない謎の声に向いていて、幕が上がりつても、芝居が始まつても、観劇する気分には到底なれなかつた。

『やめておけ。ほかにいくらでもいるだ』

『お前、自分の立場、わかつてゐるよな？俺は、お前がそんな馬鹿な奴じゃないと思ってたのに』

『よつによつて、なんで嫌な予感があたつちまうんだよ』

声は、おそらく十代後半の少年のものと思われた。何を、咎めているのだろう。その台詞から、込められた感情から、苦々しい思いと表情が容易に想像できる。

自分は夢を見ているのだろうか？一馬はほっぺをつねつてみた。古典的な方法を試した結果、痛かつた。じゃあ耳鳴りか？あるいは、いまじろ転校の疲れがでてきたのだろうか？

いずれにしても、これはおかしな状況だつた。あきらかに、普通ではありえない。

保健室に行って、横にでもなるつか。そつは思つたが、今は劇の最中だ。ほかの観客の迷惑になるので、容易に抜け出すことなどできなかつた。

いだろう。

仕方ない。上演が終わるまで、待つていよう。もしかしたら、それまでにこの幻聴が治つていいかもしない。

一馬は劇に集中することにした。まじめに観てなかつたから、どういう場面かはよくわからなかつたが、ともかく緊迫していることだけはわかつた。舞台上の役者が、二つのグループにわかれてい言い合ひをしている。そんな中、ただ立ち尽くす少女と、少女の肩を抱いている少年。やがて少女は少年と引き離され、父と思われる人物に無理やり連れていかれた。舞台の袖に引っ込んで、見えなくなる。

「レオナルド様！」

去り際、少女は叫んだ。

「クラディウス！」

こちちは、少年。

そして、一馬の網膜に、劇とは全く関係のない一つの映像が飛び込んできた。

白い光を放つ、見知らぬ少女。

純白の衣をまとい、顔はフードのようなもので上半分が隠れている。わずかに見えるその頬に流れたのは、一筋の涙。

ひどいくらいに、胸が締め付けられた。

たつた一瞬の、まばたきほどの間の、すぐに消滅した幻だといふのに。

先ほどからの不可解な現象に、一馬はますます首をかしげた。

結局、あれこれの幻聴や幻覚が気になつてしまい、ゆつくりと観劇できなままに時は過ぎてしまった。

折り重なつてピクリとも動かない少年と少女を包み込むよつこして、幕がするすると降りる。そして、ぴたりと止まって舞台の向こう側を完璧に隠した。観客席には、いまだ割れるような拍手がやまない。そのときだった。

少女の、恐怖に満ちた痛々しい叫び声。

それは、唐突に観客の耳を打つた。感激に包まれた講堂の中で、叫

び声はあまりにも場違いなものだつた。

一瞬沈黙がおりて、その後客席がにわかにざわめきで支配される。観客の心配と騒ぎが頂点に達する前に、すかさずアナウンスが入つた。

「ただいまのは、音響ミスです。心配はいりません。観客のみなさん、どうか騒がずに、順番どおりに出口に向かってください。繰り返します。ただいまのは……」

そのアナウンスの繰り返しでたいていの客は関心を失い、何事もなかつたかのように出口へと向かつていった。

ただそのなかで、北斗一馬はわけのわからない不安にさいなまれていた。

今のは？今の叫び声は？

直感が言った。

穂積瑠璃だ。

なぜわかるんだ？そんなことが。叫び声だぞ。普段の声とは違うのに。そもそも自分は、穂積瑠璃の声さえもあまりきいたことがないではないか。

いや、でもあれば、あの少女の叫び声だ。

一馬は口元を押された。

なぜ、こんなにも動搖しているのか？なぜ、こんなにも心が騒ぐ？なぜ？ろくに話したこともないのに？

ただ、既視感はあつたが、けれどそれにしても、なぜだ？

疑問に思う一方、一馬はいてもたつてもいられなくなり、照明の灯り始めた客席通路を走り抜けて舞台の上に飛び乗つた。すでに、數名の演劇部員がセットの撤収を始めていて、そのうち何人かにはあからさまに邪魔に思われているような目で見られた。しかし、一馬はそれらの視線など気にしている場合ではない。

あたりをせわしなく見ていくと、後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには四十年代ごろの男性教師がいた。

一馬は知らなかつたが、その教師は演劇部顧問なのであつた。

顧問である教師は一馬を部員であると思いつみ、見かけない顔だなとか、なんで制服のままなんとか、いろいろ不思議に思うことはあつたのだが、とりあえず舞台にモップをかけるように指示を出した。

「違います。俺、部員じゃありません」

顧問は目を丸くする。

「じゃあなんでここに突つ立つてる? ほら、邪魔だからせつせつ降りなさい」

手で軽く払うような動作をすると、一馬はあわてて頭を下げる。

「すみません。あの……さつきの悲鳴は、誰のですか?」

顧問は今一度、一馬に向きなおった。

「ああ、音響じゃないってわかったのか。一人、倒れたんだよ。どうも劇の最中に具合が悪くなつたみたいでな。保健室に運んだよ。まあ、大丈夫だ。特に心配するようなことじやない。倒れた直後はさすがに驚いたけど、今はすやすや眠つてゐるはずだ」

「保健室にいるんですね? ありがとうござります」

はじかれたように駆けだす一馬の背に、顧問は大声で聞く。

「気になる? 知り合いなの?」

「たぶん!」

勢いよくかけてく少年を見ながら、顧問は不思議そうに独り言つちた。

「なんで、倒れたのが穂積だつてわかつたんだ?」

保健室に到着すると、目を赤く腫らした千尋の姿が目に飛び込んで

きた。

息を切らすクラスメイトの突然の出現に千尋は呆然となるが、直後一馬は早口で彼女に質問する。

「無事なのっ！？」

「……え？」

「穂積さんは無事なのっ！？」

「な、え、あれ？ ほ、北斗君？」

ポカーンと口を開けたまま、千尋はまじまじと一馬の顔を見る。彼女の頭の中で、いろんな疑問が一気に渦をまいたが、一馬は容赦なく矢継ぎ早に疑問をまくしたてた。

「さっきの悲鳴、たぶん穂積さんだよね？ 音響じゃないって聞いたよ。大丈夫なの？ 先生は心配ないって言つてたけど、本当？」

「ちょ、ちょっと北斗君……」

千尋は小声でしかり、懸命に唇に人差し指をたてて合図するが、混乱している一馬にはそれが目に入らない。だが。

「静かにしろ」

低いが、ひどくあたりに響く声で、一馬は我に返つた。

カーテンで仕切られたベッドの向こうから、一人の少年が現れた。少年は一馬を睨み据えたままつかつかと歩みよる。一馬は、彼の雰囲気に気圧されてなんとなく後ずさつてしまつた。そして、自分の失態に気づく。

だが詫びを言つより先に、少年が口を開いた。

「保健室で騒ぐなんて、非常識だろ。気をつけろ」

「いふんと刺々しい物言いだつたが、一馬は素直に頭を下げた。

「ごめん。つい……穂積さんの方が、気になつて」

その言葉に、千尋が変な顔をした。

「……ねえ、北斗君、音響効果じゃないつてわかつたのは納得できるけど、どうして倒れたのが瑠璃だつてわかつたの？ 瑠璃の名前、アナウンスで言つてなかつたでしょ？」

「あ……ああ、それは……舞台の前の方で見てたんだ。だから、穂積さんだつて思つて……」

しどろもどろにウソをつく。本当は、だいぶ後ろの席に座つていたのだが、それを素直に言えば、千尋はますます変な顔をするだろう。それに、一馬自身がそのことを不思議に思つていたため、人に話すのは何となくためらわれたのだった。

「そうか、なるほどね」

千尋は、一応納得してくれたらしい。しかし目の前に立つ少年は、あいかわらず一馬を睨みつけている。

「お前、本当に前の席に座つていたのか?」

心臓が、小さくはねた。

「座つてた」

「本当か?」

「本当だよ」

一馬は我知らず冷汗をかいていた。なぜかありえないほど緊張している。ただ小さなウソをついているだけなのに。しかし、無遠慮にねめつけてくるこの少年は、一体何者なのだろうか?

「玲於奈君、瑠璃はもう大丈夫なの?」

千尋が場の空気の氣まずさをどうにかしようとして、話題を変えた。一馬はそのおかげで、少年の名前が玲於奈であるということを知った。玲於奈からわずかに刺々しさが消えて、

「ああ、落ち着いて眠つてるよ」

と、彼はカーテンの方を振り向く。

「俺はしばらくここにいる。穂積さんが田を見ましたら、送つてくれよ」

「わう? そうしてくれるとありがたいな。私、この後早めに帰らなきゃいけないから。じゃあ、もう行くね。玲於奈君、あとはよろしく

言つが早いが、千尋は問答無用で数馬の手をひっぱり、保健室を後に入つた。どうにか首だけで後ろを振りむいた一馬は、扉が閉まるそ

く

の一瞬に、自分を睨みつけるよつた、掴みかかりそうな玲於奈の目を見て、寒気を覚えた。

しばらく千尋に手をつかまされたままだつたが、彼女は階段の踊り場で唐突に一馬を解放した。

「ごめんね、一馬君。私がかわりに謝るわ。なんだか玲於奈君、瑠璃が倒れたせいで動搖してるみたいなの。本当は、いつも優しんだけど……」

「さつきの人も、演劇部の？」

「そう、月影玲於奈君。私たちと同じ学年で、副部長なの」  
ふうん、と一馬はとりあえず納得した。一人は、階段をゆっくり登りながら会話を続ける。

「で、なんで穂積さんが倒れたから、その、月影つてやつが不機嫌になるんだ？」

とたん、千尋は眉根を寄せてため息をついた。「私の勘違いだつたらいいんだけどね……」と、小声で言つ。

千尋は勢いよく一馬に振り向いて、「北斗君は、部活関係者じゃないから言つけど……」と、あたりをはばかるように、彼に耳打ちした。

「たぶん、二人は付き合つてるのよ」

その瞬間、一馬の胸によくわからない感情が去来した。雨雲が心中に宿つてゐるよつた、重たくて、やや陰鬱な気持ち。そして舌打ちしたくなるような思い。単なるクラスメイトの色恋沙汰など、かなりどうでもいいものでしかないのに。じゃあこの、納得できないもやもやしたものは何なのだろう。

（納得？なんだそれ？）

まさか、嫉妬か？いや、そんなはずがない。これは、穂積瑠璃という少女に感じるものではなくて、さつき睨まれたあの少年、月影玲於奈に由来する感情だ。

何となくだが、一馬は思った。

彼女は、あいつに近づいてはいけない。

「ほんとはね、うちの部活、部内恋愛禁止してるのよ。副部長がその撃破つたとなつたら、そつとつやばいことになるわね」  
一方千尋は、一馬が何を考えて黙つてへつているかなど、思つてもよらなかつたのだった。

「んーまあ、私としては瑠璃を応援してあげたいんだけどさ……」「え? どうして?」

一馬は我知らずするじく聞き返してしまひ。

「だめなんだろ? 本当は」

「うん……でもね、私、一年生のころから瑠璃が玲於奈君に片思いしてゐるの知つてたから……だから、別れなさいっていうのも、ちょっとね……」

そこまで言つて、千尋はあわてて付け足しした。

「あ、でもね、これはあくまで私の推測だから。間違つてるかもしれないんだからね。だから、誰にもいいふらさないで手をあわせて、千尋が一馬に懇願する。一馬は腑に落ちない様子だったが、ただ一言、「わかつた」と言つてうなずいた。

\*

千尋と一馬が出て行つた後の保健室では、瑠璃のかすかな寝息が聞こえるばかりだった。

こんこんと眠る少女のそばに、一人の少年が寄り添つてゐる。いとおしむような切なげな視線を彼女の上に落とし、玲於奈は、そつと頬にふれた。

「瑠璃……」

玲於奈は、自分だけにしか聞こえないほどの小声で、祈るよつよつと  
さやいた。

「あいつを、お前には近づけやしない……お前は、俺だけのものだ  
から」

「穂積さん」

確認するようにもう一度言ひつと、北斗君は私のもとに歩み寄つてきた。喉の奥がひきつる。彼から少しでも後ずさらうとしたけど、それは何だか変な気がしたから、頑張つてその場に踏みとどまつた。でも、体が震えてどうしようもない。

私と北斗君との距離があと一、三歩で消滅するところで、玲於奈君が私の前に立ちふさがつた。

玲於奈君の背中越しから、北斗君を見る。北斗君は、私と同じように、突然割りこんだ玲於奈君に虚をつかれたような顔をしてたけど、すぐに気を取り直して言つた。

「あ、ごめん。俺、ぶしつけだつた？」

申し訳なさそうにはにかみながら、私を見る。たぶん今のは、私に向けて言つたものなんだ。返事をしようとしたけど、先に玲於奈君が口を開く。

「瑠璃が震えるのがわからなかつたのか？」

静かで落ち着いた声だ。でも、何か怒りにも似た感情がこもつている。やつきの保健室と同じで、いつもの玲於奈君らしくない。でも、それ以前に、私つてそんなに大きさに震えてたのかな？

「無意味に近づくな」

「いや……俺は……ただ、穂積さんはもう大丈夫なのか気になつて……それだけだよ」

二人の間の空氣、傍目にもわかるほど、氣まずいものになつてゐる。

北斗君は、玲於奈君からまた私に視線をうつして、無言で問い合わせた。

一瞬、北斗君の目を見たその一瞬。私は、恐怖以外の何かを感じた。これまで、彼が夢の中の男の子と似てゐるせいで、命を狩られるかもしれないという本能的な怖れだけを味わつていた。

だけど、今のは。

私を気遣つてくれる彼の視線。瞳。

何かを感じ取つたのは、私だけ？それとも、北斗君も？まるで唐突に、二人の間に磁石が出現したみたいだ。

「瑠璃なら大丈夫だ。行くぞ」

玲於奈君は切り捨てるように言つと、硬直したままの私の腕をひっぱつて、帰路についた。

玲於奈君が強引に引っ張りながら歩くので、私は彼についていかざるを得なかつた。顔を前に向けて歩きながら、後ろの方にいる北斗君のことを考える。

北斗一馬君。転校生。夢の中の男の子に似ている。ただの直感でそう思つた。少しだけ交わした会話。「大丈夫？」という優しい問い。

彼の瞳。

わからない。

何なんだろう。

わからない。

私は一体、どうしちゃつたんだろう？

恐怖以外の何か。

それつて、何？

彼から感じる、何か。

ねえ、北斗君。

あなたは、一体、誰なの？

私は考へに没頭していた。だから、玲於奈君が小さく舌打ちしたことに、気がつかなかつた。

## ACT13 少女の夢で、何がが

茫漠とした眠りの世界に漂つていて、ふつと意識の焦点があつたとたん、あの夢だとわかつた。後から気がついたことだけど、そんなふつに思つたのは、このときが初めてだつた。

そして私が、いつも同じように繰り返される夢に、干渉したこと。も平面なのが立体なのがさせない暗闇。その中に、一筋の光線。私は自分を包み込む巨大なシャボン玉に触らうとして、そして男子に気がつく。

ああ、いつものあの子だ。そしてあの子が駆け寄つてくるその間、私は不吉な予感にさいなまれる。けれど、なぜか今回は、また別のことを感じていた。

私は、この男子に似ている人を知つていて、

その人は、転校生。私のクラスメイト。

私は、立ち止まつた黒ずくめの男子をじつと見上げていた。男子が、何かを言う。そして、握られていた短剣が獲物を欲して光る。口の端を吊り上げて、ほほ笑む男子。けれど私は、別段怖くなかつた。だって、私はこの子には絶対刺されないのだから。でもそれは、夢から醒めるからという確信があつたわけじゃなくて、とてつもない自信があつたせいだ。

この子は絶対に、私を刺せない。

私に危害を加えることが、できない。

少し躊躇したけど、思い切つて声を出す。

「あなたは、誰？」

とたん、男子が振り下ろそうとしてた腕を止めた。男子はフードをかぶつてるせいで口から上が見えないのだけれど、私は、彼が驚愕に瞳を見開いたような気がした。

「あなたは誰？」

さつきよりも、強い口調で聞いてみる。

男の子は、動かない。腕が中途半端な位置のままで、小刻みに震え  
たままで。口元が、あきらかにわなないでいる。

「……どうしたの？」

私が言ったのと同時に、男の子は急に口を大きく歪めて膝をついた。声は聞こえなかつたけど、たぶん彼は、泣いているのだ。頭を抱えたり身をよじる様子から、想像できいくらいの、激しい恸哭が支配しているんだろう。でも私には、なぜ男の子がこんなことになつてしまつたのか理解できなかつた。

男の子は嘆き悲しむ。一体どうしたんだろう。私には、何がなんだか全くわからない。

ただひたすらうろたえる私に向つて、急に糸が切れたようにおとなしくなつた男の子が、何かを告げる。  
もう何もかもに力尽きたよつて。

それは、別れの言葉。

ただ一言、唇が動いて、「わよつなら」、と。

その頬には、涙が流れていった。

そして、私の目の前で、短剣は男の子の手によつて、男の子の胸に突き刺さつた。

けれど血は、見えなかつた。

私が、悲鳴を上げながら、いつものよつて田を覚ましたからだ。

心臓が激しく動いていて、息もあらい。  
ベッドに身を起したまま、夢の余韻の冷たさと不吉さにおびえてい

た。

今のは何なの？

どうして、私を刺そうとしていたあの子が、自分を刺してしまったの？

それに、泣いていた。

「さよなら」って、言つていた。

ある転校生の顔が、脳裏に浮かぶ。

私は、不安に突き動かされるまま、慌ただしく学校へ行く支度を始めた。

駆け足で教室に飛び込むと、早い時間帯にもかかわらず、何人かが既に飾り付けのチェックや商品の確認をしていた。息を少し乱したままあたりを見回すと、二人の男子と一緒にいる北斗君が目に飛び込んできた。

窓に張り付けあつた飾りかどれたのか、形を整えながらガムテープで再びくつづけている。談笑しながらの作業で、楽しそうだ。そういうえば、北斗君は転校したばかりだから、こうやってクラスの誰かと話しているところを見るのは、初めてだな。

ちょっとだけ、安心した。

なんだか気が抜けて、自分でも無意識のうちに鼻で笑ってしまった。  
それから私は、講堂へと向かう。

今日の公演は午前中にあるから、と、と準備をしないと間に合わない。扉を開けてそつとのぞくと、顧問の先生や部員のみんなが見守る中、玲於奈君と若山先輩が一人だけのシーンの確認をしていた。慎重に扉を閉めたのと、千尋と越野先輩が駆け寄ってきたのが同時だった。

「あ、先輩、おはようございます。千尋もおはよう」

越野先輩も小声で、おはようと返してくれた。千尋は朝のあいさつそっちのけで、私の顔を窺うようにじろじろ見てくる。

「あ、ちよつと干尋ちゃん。そんなに熱心に見つめたり、瑠璃ちゃんが照れちやうでしょ？」

越野先輩は、笑顔でちやかすように言った。でも言われた千尋の方は、寂しそうだった。

「だつて、心配なんです」

ぽつりと言つた彼女が、今にも泣きだしそうだ。

「瑠璃、ごめんね。昨日あんなに苦しそうにしてたのに、何もできなくて……やつぱり、無理にでも止めればよかつたよ……」「そんなこと言わないで。千尋のせいじゃないんだから」

胸が痛んだ。千尋は、私なんかのためにこんなに心配してくれている。私、そんなことされるような人間じゃないんだけどな。でも、うれしい。

私は千尋に感謝の気持ちと、もう平氣という意味を込めて、笑つた。「大丈夫。昨日たつぱり寝てもう元氣いっぴだから。ちやんと今日も舞台に立つからね？止めたつて無駄だよ」

「でも……」

それでも何か言い募るゝとする千尋の肩に、越野先輩が手を置いた。「いいじゃないの。」こは、瑠璃ちゃんの役者魂に免じて応援してあげましょ、ね？甘やかしすぎるといい子にならないのよ

越野先輩はありがたいことを言つてくれたけど、最後の単語は何？

「……先輩、なんですかい？私は千尋の子供ですか？」

「やうよ。瑠璃ちゃんは子供。千尋ちゃんがお母さん。私がお父さん」

さもあたりまえのような口調だ。そういうえば、越野先輩はテンションが高いと変なことを言つ人だつたな。

ちょうど、舞台で最後のシーンの確認が終わつた。緊張が解けた舞台から降りて、玲於奈君がやつてくる。

「穂積さん」

部活内では、玲於奈君は私のことを穂積さんつて呼ぶ。付き合ひの前と同じよつに。だつて、部内恋愛禁止なのに恋人同士だつてばれるわけには、いかないから。

「あ、玲於奈君」

ちなみに私はもともと玲於奈君つて呼んでたから、いつは意識することないんだけどね。

「瑠璃」

今まで沈んでいた千尋が急に、私を呼んだ。振り向くと、宝物を見つけて喜んでいる子供みたいににやに笑つて、それから越野先輩と一緒に舞台裏を手伝いにいつてしまつた。

何だらう。今のは。千尋の意図するとこが全然わからない。

「大丈夫？」

玲於奈君は、碎けた明るい調子で聞いてくる。これがいつもの、部活での玲於奈君だ。私は、目を合せるのが急に恥ずかしくなつて、うつむいて返事をした。

「うん。たくさん寝たし、もう平氣」

顔の温度が、だんだん上昇してくるのがわかる。心臓も、いきなり自己主張してドキドキ言い出した。

やつぱり、昨日のこと考えたら、目を見て言えないよ。

ちょっと玲於奈君は考えるように黙つて、口を開いた。小さくて低くて、そして心底落胆したような声。

「俺、午後は店番しなきやいけないんだ。スケジュール一緒になれなくて、ごめんな」

玲於奈君は、午前に公演をした後、午後は自分のクラスの店番をしなくちゃいけない。ちなみに玲於奈君のクラスの出し物は、迷路らしい。私は、昨日の午前中が店番だったから、今日の午後は自由なのだ。文化祭は一日間あるんだけど、本当なら一日間とも、午前か午後に店番をしなきやいけない。でも私は、クラスのみんなの好意で店番を一日だけにしてもらつた。これはとってもありがたい。そうじやないと、自由時間がゼロなんてことになるんだから。

「ううん。しょうがないよ」

「でも俺、一緒にいたかったよ……」

「……ありがと」

やつぱり私、玲於奈君が大好きだ。

そして、開演準備が始まつた。

役者はメイクと衣装。スタッフはセットの確認。小道具の確認。照明や音響は最後までチェックを怠らない。顧問の先生の指示が、大

さく講堂にこだまする。

開演二十分前、お客様さんが、入ってきた。

役者は舞台袖にそつと移動して、幕が開くのを待つ。

私は頭の中で、ひたすら場面を思い浮かべ、台詞を繰り返していた。

いつものように、演じるために集中する。

だから、若山先輩が声をかけてきたことに、すぐに気がつかなかつた。

「ごめんね。集中してるのに」

若山先輩は申し訳なさそうに言つて、私に耳打ちする。

「公演が終わつた後、ほんの少しでいいの。話がしたいの」

若山先輩は、私の返事を聞かなかつた。まるで私の都合なんか無視してゐるかのよう、さつさとべつの場所に移動してしまつた。いつもの先輩らしくなかつた。

## ACT15 少女は星を受け取る

「これ、あげるわ」

公演の後。着替えもちゃんとしない状態で、先輩は私に体育館裏まで来るようになつた。

しかも樂屋から抜け出す時、先輩と時間をずらしていくように言つたのだ。トイレに行くふりをしてね、という指示まで受けた。私は先輩の言つたことを守つた。トイレのある通路をまっすぐ行けば、ちいさな出入り口がある。そこから体育館裏に行けるのだ。誰にも見つからぬようあたりを見回しながら歩いていたけど、なんだか馬鹿ばかしくなってきた。

なんでこんなに慎重にならないといけないの？

先輩は、私に何の用があるの？

そもそも、一人きりになるのにこんなに慎重になる必要つて？ 疑問がいっぱいのまま、まだドレスを着ている先輩に追いついて、最初に言わされたのがこの一言。

「これ、あげるわ」

言葉と一緒に差し出された物を受け取つて、私はそれをまじまじと見た。

ペンドントだ。けつこうチヨーンが長い。

そして、星。トップアクリセサリーとして、ちいさな五芒星がついている。プラスチック製なのだろうか。半透明の黄色。よくみると、銀色の星の形をしたスパンコールに似たものが五枚、星の中に閉じ込められている。

なんだろう。先輩の用事つて、これ？

「それはあなたのものよ。これは、先輩からの命令。それを肌身離さず持つていて。常にどんなときにも。眠る時もお風呂に入る時も、身につけていなきやだめ。そうしないと、あなたが危ないわ」なんだかわけのわからないことを滔々と言つて、私の頭はすっか

り混乱していた。おまけにその原因をつくった先輩はせつせと立ち去ろうとした。

「あ、待って下さい！」

私はかろうじて声を出して、先輩を引きとめる。

「あの、えつと……これは、どういうことですか？」

先輩は、私を見なかつた。首がちょっとだけ私の方に振り向いて、その状態で止まつたまま、静かに口を開く。

「あなたは気がつかなきやいけない。質問するだけじゃ、答えはつかめないわ。お願い、早く気がついて」

先輩は、空を見上げる。体育館裏からだと、建物やそばにある木に囲まれて、見上げても全然解放的な気分にはなれない。

「早くしないと……早く逃げなきや。感づかれるわ。この子も危ない。あなたも危ない」

一瞬、聞き間違いかと思つた。

先輩の声が、別の女の人の声だった。

背筋に寒気が走つた。

立ち尽くす私の目の前で、若山先輩は倒れた。まるで、人形をあやつつていた糸が切れたように。

数瞬後、あわてて駆け寄つた私に声をかけてきたのは、目を覚ました若山先輩。

「あれ……何で私、こんなところにいるの？」

先輩は、つい先ほどまでの出来事を、忘れていた。

私は、星のペンダントを握りしめながら、何も言えず震えていた。

## ACT16 少女は思いもかけずに

着替えをすませ、クラスの方へいかなきやいけない部員以外で後片付けをして、私は暇を持て余していた。

玲於奈君はもちろんのこと、千尋も自分のクラスの方へいつている。かなは同じクラスだけど、当番だから一緒に行動できない。友達の少ない私は、誰ともつるまずに一人きりでふらふらしていた。おなかが空いたので、焼きそばを売っている教室に入り、もくもくと食べる。

あーあ。人ごみつて、苦手なんだよなあ。

文化祭前の熱氣はすぐ心地いいんだけど、いざ当日となると、何だか気後れして楽しめない。ほかの人気が騒ぎに浮かれて、高揚して楽しんでるのを見ると、私ってなんて冷めてるんだろうと思う。スカートのポケットに手を入れる。指先に、チエーンがふれた。そのまま探つて、小さな星の輪郭をなぞる。特にその行動に意味なんてないんだけど、ただ、手が伸びた。

そして、先輩の言葉を思い出す。

・・身につけていなきやだめ。

そうしないと、あなたが危ないわ。

身につけなきやいけないことは、首にかけなきやいけないってことだよね。

いつもそうしてるって、何で？

でも、先輩にそのことを聞いたって、答えは返つてこないだらう。だって先輩は、私を呼び出してこのペンダントを渡した記憶なんて、無いんだから。

一体どうこうと、そういえば、別の女人の声で、「感づかれる」とか言つてたような。「逃げなきや」も、言つてた。感づかれるとか、逃げるって、誰に感づかれて、誰から逃げなきやいけないの？

首をひねつた。一つのことが頭に浮かぶ。

「あの、夢の中の男の子……？」

でも、あの子は昨日、自分で自分を刺した。それに、私は確たる自信を持つて、この子は私を傷つけることはできないと思つたのだ。つまり、何ていうか変な言い方だけど……あの子は敵じゃないと思う。

じゃあ、誰？

……はあ。私つたら何やつてるんだろう。こんなこと悶々と考えるなんて、馬鹿ばかしいにもほどがあるな。

私は、あれこれ思いをめぐらすのが億劫になつて、知らないうちにため息をついた。

ふと、視界に見知った顔がある。

私はそのほうに瞳を吸い寄せられた。

北斗一馬君だ。朝見かけた男子と一緒にいる。みんな、焼きそばを頬張りながら楽しそうに談笑していた。

今朝の不吉な予感が、再び胸をよぎつた。

そう、私は、あの夢を見た後、強烈な不安にさいなまれたのだ。なぜだかはわからぬ。根拠なんてないけど。

でも、北斗君が、危ない。

夢の中の男の子が流した涙。さよならとこう言葉。思い返すだけ

で、動悸が早くなる。

北斗君。

私は、朝よりも焦った。

朝よりも必死でひたむきだつた。

だめ、北斗君。

あなたに、何かが起つる。

そんなの、だめ。絶対に、だめ。

私は、朝よりも必死で切実でひたむきだつたから、数瞬の間、我を忘れていた。

そして。

「……穂積、さん？」

名前を呼ばれて、私はとんでもないことをしてゐる自分に気がついた。  
何で、北斗君の肩に手を置いてるの?  
何で、北斗君とこんな近距離で顔を突き合わせているの?

がちがちに固まつた状態で後ろによろめいた。北斗君とクラスの男子二人が、あっけにとられた顔をして私を見ていた。とりあえず、叫ばなかつただけ賢明だつだと思う。そういうことにしておこう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6096a/>

---

光の子 太古の星はとわに輝く

2010年11月25日17時25分発行